平成２０（２００８）年１月１５日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．２（総会特集　議事録）

発行　南極 OB 会
会長　川口貞男
編集　広報委員会

会則など骨格決まる

ＯＢ会２００７年度総会開催

南極ＯＢ会総会と、第４９次南極地域観測隊の壮行会が、１１月８日（木）午後６時半から東京・千代田区神田錦町の学士会館で２００余人が出席して開催された。南極ＯＢ会は、６月２３日東京・霞ヶ関ビルで開いた臨時総会で、死去された村山雅美前会長の後継に川口貞男氏を新会長に選出、会長指名による運営委員会等により会則や収入財務計画、２００７年度予算、会報発行などＯＢ会活動に必要な組織の骨格部分の在り方を検討してきた。この日の総会には、これらの基本的な案件について担当責任者から検討経過報告があり、提案事項は拍手で承認された。

２００４年１１月、当面する南極観測５０周年記念事業実施のために組織された南極ＯＢ会は、この日の総会での諸案件決定により、基礎的な要件を備えた会となり、本格的な活動を展開することになった。

総会の状況

以下に平成 19 年度の総会の議事状況をご報告いたします。

（総会の様子）

川口ＯＢ会会長挨拶
―通信費納入を要請―

総会冒頭、川口会長は次のように開会の挨拶をした

昨年の南極観測５０周年記念事業で、ＯＢ会はたいへん盛り上がり、中でも地方支部との交流はすばらしいものがあった。会長を引き受けるに当たり、情報を交流することが重要なことだと考えた。そこで広報委員会を新たに設け、ホームページをさらに充実させ、ＯＢ会報を発行することにした。創刊号は既に届けてあるが、年に３回ぐらいは発行したいと考えている。

会報発行には印刷費や発送費などがかかり、その他ＯＢ会活動や事務所の経費など経費が必要だ。まことに申し訳ないが「通信費」という名目で年３千円を出して頂きたい。

きょうここで今後ＯＢ会はどのような活動を、どのような体制でやっていくかという大切なことを提案するので、検討して欲しい。今後ＯＢ会の活動をどうやっていくか、ここで結論を出していただきたい。議長は渡辺興亜運営委員長にお願いする。

隊次幹事を明確に
渡辺委員長一般報告

渡辺興亜運営委員長が議長になり、総会の司会をするとともに、運営委員会一般報告をした。発言内容次の通り。

今年６月に会長により運営委員長を仰せつかり、新しい運営委員会を組織した。会務に関する諸案件の検討経過について一般報告をする。ついで会計担当の増田博さんが２００７年度予算について、広報委員長の深瀬和巳さんが広報活動について、南極観測５０周年記念事業は若干の余裕が出たので、５０周年記念事業継続委員会委員長の国分征さんが今後どのように活用していくかについて、最後に、ＯＢ会会則が不備でその改正案を検討してきたので、小野延雄さんがその内容について報告し、それらを議長総括の中でご賛同を得たい。

一般報告　**渡辺興亜運営委員長**

南極ＯＢ会の役員は、会長（川口貞男）、特別顧問（鳥居鉄也、田英夫）、副会長、評議員、幹事などで成り立っている（役員名簿は当会報２号資料編参照）。幹事は各年次の隊次幹事、気象庁、国土地理院などの職域幹事である。隊次幹事がＯＢ会の運営基盤と考えているので、各次隊を代表する隊次幹事はしっかりと決めて欲しい。

運営委員は、副会長や隊次幹事から隊次や年代のバランスを考慮して選出され、任期は２年間。各期で半数ずつ交代するような仕組みにしたい。今期（２００７～０８年度）運営委員の担当を付録資料編に示した。この外の委員会は、広報委員会、５０周年記念事業継続委員会、アーカイブ委員会、南極教室委員会がある。

運営委員会は６月の臨時総会で発足以降、毎月１回会合を開き、会務処理、会則改訂、将来計画、会報発行など、ＯＢ会の基礎固めの仕事をしてきて、その纏まったものをきょうの総会で報告している。

会計報告　**増田　博会計担当委員**

８月から会計を担当している。分かりにくいのは、５０周年記念事業委員会関係の会計と、ＯＢ会の会計との関係だが、これは全く別の会計、別の財布です。よってＯＢ会の会計の概要だけを報告する。

２００５年６月に、それまで極地研の方でやって頂いていたＯＢ会の会計２２０万円ほどを引き継いだ。０５年から０７年にかけてのほぼ３年間は、ＯＢ会活動そのものが５０周年記念事業の活動だったと言える。会員の香典、ホームページ関係、諸寄付受け入れなどはＯＢ会の会計とした。１０月末で約２３０万円とパソコン２台、プロジェクターがＯＢ会の財産であり、３年間で２０万円余増加したことになる。

今後の収入は会員からの通信費が主体で、１人３０００円で７００人くらいの協力を得られることを前提に、年間ベースの収支計画を作った。（下表参照）。支出は会報の発刊、会の基盤整備など２３０万円程度を見込んでいる。

収入の柱は、通信費にある。ぜひご協力のほどをお願いしたい。

２００７年収支計画

（単位：千円）

収　入		支　出	
通信費	2,100	事務室運営関係費用 （借料、光熱、水道、ごみ、事務用品、通信費）	1,047
南極教室から		会報発行関係費用 （年３回発行、印刷・郵送料等）	900
寄付金	60	慶弔関係費用 （会員関係弔電等）	41
グッズ売上げ	100	運営委員会等交通実費	252
		予備費	20
計	2,260	計	2,260

広報関係報告

深瀬和巳広報委員長

広報活動の柱は、ホームページの継続・充実と新しくＯＢ会会報の発行です。ホームページは既に立派に運営されているが、さらに充実させたい。会報の創刊号は１０月中旬にお届けした。初めてのことで至らぬ点が多いが、さらに充実を図りたい。

会報だから、ＯＢ会の方針や報告などが中心になるが、会員のための会報にするため投稿を期待している。各隊や支部の活動や催事の報告などはもちろん歓迎だが、エッセー等もお願いしたい。家族の参加もあっていい。またＯＢ会会員は博覧強記、博識の方、スペッシャリストの集団だから、蘊蓄を傾けてくれれば、質の高いすばらしい会報になるだろうと、考えている。

通信費の納入をぜひお願いしたい。そうでなければ２号で廃刊という事もあり得る。どうかよろしく。

５０周年事業関連報告

国分　征５０周年記念事業継続委員長

５０周年記念事業の実行委員会をやっていた関係で、継続のこともやることになった。記念事業については、先に会報と一緒に「事業報告」を送ってあるが、ここでも触れることにする。

記念事業は、祝賀会、講演会、出版、記念品などを骨子とした。支部は１５支部で講演会やイベントが計画され、沖縄、四国を除いて予定通り行われた。これからは両支部の行事と、募金に応じてくれた企業への報告書作成が残っている。

記念事業の計画全体を見ると、予定通り、成功裡に終えることができた。ただ昨年夏の段階で募金がどのくらい集まるか不明のため、祝賀会に外国の方を呼ぶ計画は取りやめになった。

募金は、個人、企業で２５００万円を目標にした。これに対し個人では７５３人が応じてくれて約１２００万円、１人当たり約１万５０００円、企業は新聞社、通信社、建設業など８２社で１４５０万円ほど、合計で２６５０万円余に達し、目標を上回った。これに祝賀会参加費や記念品の売り上げなどがあり、収入は３２００万円余、これに対し支出は２６００万円余で、１０月末現在で残高は６６６万円ほどになった。これから両支部の講演会や報告書作成費などの支払いがあり、実際は５００万円程度であろう。

残高をそのままＯＢ会に移すことは募金の趣旨に合わない点があるので、継続委員会を作ってこれからどうするかを検討している。これまでやれないままできているアーカイブ計画もその一つ。これまでの各方面の貴重な資料を集めて、きちんと保存していくことは重要なテーマだ。このためには極地研究所（２００９年度立川に移転の予定）との連携が必要である。ご意見を伺ってまとめたい。

ＯＢ会会則の報告

小野延雄運営委員

２００４（平成１６）年１１月４日のＯＢ会設立総会の際、メモ的に会則が示され、準備していることが知らされた。翌年の総会でも会則は見せられたが、きちっと総会で決めたという記録がない。そこでそれの改正ということで、この総会に会則を諮りたい。(会則全文は付録資料編参考のこと)

この南極ＯＢ会はちゃんとした法人格ではなく、変則的な形でありながら、任意団体を準備したい。どういうことかと言えば、南極観測隊に参加した者全員が会員であり、それを「母集団」と考える。会費を取ると、会費を納めたものが会員となり、いわゆる法人的な性格を持つことになる。

だからこの会としては、当分の間は「会費」をとらない。その代わり、情報を送り、その受け手が「通信費」というお金を出して頂きたい。「通信費」を出さない人も、会員であるという「母集団」である。今年出発する第４９次隊で南極に初めて出かける人も、今回から会員であるという位置づけにしたい。

第２章（会員）第５条に「本会は次の[会員]をもって組織する」とあり、最初に南極観測隊員、ついで「宗谷」乗組員、３番目に「運営委員から推薦された者」と書いてある。この３番目のことは「ふじ」「しらせ」の乗組員の方のことで、この方たちを母集団として考えると、この方たちで過半数を占めてしまうことになってしまう。そこで「会則運用規程」第１条に「[ふじ][しらせ]の乗組員は職域幹事の推薦により会員となる」とした。最初からは母集団の中に入っていないという考え方が特徴だ。

第５条には「会友」の規定がある。ＯＢ会の活動に深くかかわり入会を希望する方は運営委員会の推薦で「会友」になることができ、会員とほとんど同じ扱いになり、会友からは通信費などを徴収できる、とした。

第３章は「役員」。会長だけは総会で選出する。それ以外の役員は、会長が指名、あるいは推薦による。任期はそれぞれ２年で、再任は妨げない。

第４章は「総会」。総会は、成立要件を定めない、定足数は設けない、ことにしてある。それは母集団が大きいからで、もし定足数を設けると、委任状などの問題が起きてくる。そして議決は案内状を受けて参加した人の多数決、過半数とする。

地方には支部を置く事ができ、支部長を選出する。

この会則の変更は総会の議決で行う。賛同が得られれば、きょう２００７年１１月８日から施行する。

次に会則運用規程ですが、第２条情報連絡は、会報、ホームページ、電子メール、ファックスや文書送付などで行う。第３条会費等、会費は当分の間徴収せず、情報連絡を受けようとするものは通信費として年額３０００円を納めるとした。

第５条総会の開催日は、観測隊壮行会の日とした。

第６条会計年度は４月１日から翌年の３月３１日までとする。年度の半ばで総会は開催されることになる。だから翌年度前半は、前年の総会で承認された事業計画や予算に準じて行う。

支部は現在１５支部ができている。支部ごとに細則を定めることができる。

第１０条の委員会だが、現在運営委員会、広報委員会、５０周年記念事業継続委員会、アーカイブ委員会、南極教室委員会ができている。

第１１条事務局には非常勤の事務局員をおく事ができる（注：現在元極地研職員長谷川慶子さんが勤務中)。会員、会友の訃報が入った時は弔電等を送ることができる。運用規程の変更は運営委員会で審議して、総会の承認を得て行う。ご承認を得られれば運用規程も今日から施行する。

渡辺議長

以上で報告を終わります。本日の総会で議決するものは、増田委員からの予算案と小野委員からの会則改正の件です。多数決で決めたいと思います。いかがでしょうか、ご賛同をいただけるでしょうか。(大きな拍手)。有難うございました。全員賛成とみなします。

以上で、総会終わります。

（以上で総会での報告内容議事録は終了。表示された各種資料は付録資料編に一括掲載した。）

第４９次隊壮行会開く

南極ＯＢ会主催の第４９次観測隊壮行会が、１１月８日夜南極ＯＢ会総会に引き続いて学士会館で開かれた。４９次隊（伊村智隊長）は、越冬隊（牛尾収輝隊長）２９名、夏隊３７名（国内同行者５名、交換科学者３名を含む）の合わせて５６名で構成される。ＯＢたちは後輩の活躍と安全を願って、盛大に激励した。観測船「しらせ」がこの航海で引退するので、４９次の越冬隊員は、オーストラリアのチャーター船で帰国することになる。

壮行会は西尾文彦運営委員の司会で始まった。川口ＯＢ会会長は開会の挨拶の中で「後継の観測船は舞鶴で着々と建造工事が進んでいて、来年３月か４月には進水する」と紹介、ＯＢの方たちは後輩を大いに勇気付けて欲しい、と要望した。

夏隊紹介（マイク：伊村観測隊長）

祝辞は２人の先輩が述べた。まず第３次から６次まで「宗谷」のヘリコプターの操縦に当たった渡辺清規さんが演壇に立った。「宗谷は小さな船で、よくビセットされた。船で越冬するのではないかと水や燃料・暖房を節約したり、回りの氷を融かすため宗谷の煙突の煤を集めて氷上にまいたり、竹さおで周りの氷をついたりしたものだった。空輸に切り替えて輸送は成功したのだが、宗谷と基地との飛行距離が長く、６次の時は片道８０マイルに達していた。今は近代化してはいるが、南極の自然は厳しいので、元気で任務を達成し、無事帰国して欲しい」と語った。

越冬隊紹介（マイク：牛尾越冬隊長）

続いて観測隊の先輩吉田栄夫さん。「壮大な観測計画が行われようとしていて，ＯＢとしてたいへん喜んでいる。その背景には宗谷の時代から積み上げられた努力と経験があるのだと思う。４９次の中で初めて南極に行く方に申し上げたい。観測隊はコックさん、お医者さん、機械屋さん、観測する人と、いろんな人と生活する集団だ。こんな機会は日本ではほかにない。この機会を心ゆくまで味わい、楽しんでいただきたい。元気で帰国された後今度はＯＢとしてまたお会いしたい」とアドバイスした。

乾杯の音頭は国分征さん。「いろんな人といろんな仕事を通じて、新しい体験をしてきて欲しい。しらせの乗員の方は最後の航海で感慨深いものがあると思うが、安全な航海を祈る」と挨拶、全員で壮途を祝し乾杯、懇談に入った。

宴たけなわになり、北海道支部の高木知敬さん、阪神支部の林原勝美さん、茨城支部の松原廣司さんらが激励の挨拶をした。ついで昭和基地の４８次隊から送ってきた祝電を披露した。

そして、４９次隊の伊村隊長が夏隊の隊員を一人ずつ氏名と任務を紹介、続いて牛尾越冬隊長が越冬隊員を同じように紹介した。さらに最後の航海になる「しらせ」の品川　隆艦長が決意表明し、柿沼清一さんの締めで壮行会を終えた。

（注）４９次隊は
越冬隊　２９名
夏　隊　３７名
平成１９年度外国共同研究（英国シグニー島基地）
平成１９年度交換科学者（英国ロゼラ基地）

推進本部の壮行会

南極地域観測統合推進本部（本部長：渡海紀三朗文部科学大臣）が主催する第４９次南極観測隊および「しらせ」乗組員の壮行会は、１１月１３日（火）午後５時半から、東京・港区元赤坂の明治記念館「富士の間」で開催された。

「しらせ」最後の旅立ち

海上自衛隊の南極観測船「しらせ」（基準排水量１万１６００トン）は、１１月１４日正午、東京・晴海埠頭から最後の航海に出発した。オーストラリアのフリマントルで、空路到着した観測隊員を乗せ、南極に向かった。「しら

せ」は来年４月に帰国すると、退役することが決まっている。
「宗谷」「ふじ」に次ぐ３代目の観測船として１９８３年以来、２４回の航海に当たった。今回で２５回目の航海になる。世界屈指の砕氷能力を持つこの船は、１度も氷海に閉じ込められたことはなく、昭和基地に接岸できなかったのはたった１回だけという。退役後の運命はまだ決まっていない。

第４９次観測隊出発

伊村智隊長ら第４９次観測隊は、１１月２８日成田空港から空路出発した。２９日オーストラリアのパース着、郊外のフリマントル港で、先着している観測船「しらせ」の品川艦長らの出迎えを受け、乗船した。
「しらせ」は物資の搭載などを終え、１２月３日に南極へ向け出港した。海洋観測などをしながら氷海に入り、１２月下旬には昭和基地接岸を目指す。

後継船の名も「しらせ」

１１月１３日の南極地域観測統合推進本部総会で、今次航海で退役する観測船「しらせ」の後継船の名前も「しらせ」とすることが決まった。現在舞鶴で建造中の新船の名前は、今年の８~９月にかけて公募された。その条件として現存する船の名前は対象外としたため、今から１００年近く前、日本人として初めて南極に上陸した白瀬隊が命名した「ゆきはら（雪原）」が一番多かった。しかしその人たちも「しらせ」に応募したかったとの意見を寄せる人が多く、また白瀬中尉の故郷秋田県にかほ市や南極ＯＢ会なども「しらせ」の名を引き継ぐことを強く要望していた。
こうした要望にこたえて船名選考委員会は、新船が就航する前に現在の「しらせ」は引退して船名がなくなることを考慮、今回の決定となった。

５０次隊隊長は小達氏

南極観測推進本部は１１月１３日の総会で、来年１１月出発する第５０次隊の主要人事を次のように決めた。
・隊長兼夏隊長　小達（おだて）恒夫極地研究所教授（４９）＝生物海洋学
・副隊長兼越冬隊長　門倉昭・同研究所准教授（４９）＝磁気圏物理学
・夏期セールロンダーネ山地調査担当副隊長
大和田正明・山口大大学院理工学研究科教授（４６）＝地質学・岩石学
・夏期設営担当副隊長　石沢賢二・同研究所事業部極地設営室長（５５）

来年ミッドウインターは６月２１日の予定

２００８年のミッドウイターは、６月２１日（土）午後１時から開催する予定です。
ＩＧＹとＩＰＹ４に関する講演の後懇親会を開きます。
会場は未定。後日案内します。
多数のご参加をお待ちいたします。

連載　支部便り①　(茨城支部)

茨城支部はOB会本部の設立を受け、2006年 4 月 1 日に筑波大学の安仁屋政武氏（29夏）を支部長として発足した。人数は約 200名と思われるが、連絡先の判明している会員の数は9割程度である。

さて、その立ち上げに関しては、茨城県内各地における南極OBによる古くからの地域活動が母体になっていることを、記録の意味も含め触れておかなければならない。つくばでは 1987 年に当時気象研究所に在職された手塚正一氏（22冬、27冬）を中心として、「つくばオーロラ会」が結成され、年1-2回の会合をもっていた。南極OBの多い、国土地理院、産総研、高層気象台、気象研が交代で幹事となり、壮行会の開催や名簿の更新を行ってきた。そして、現在でも茨城支部活動と平行して活動は行われている。

一方、日立にも南極OBの地域団体があり、元日立製作所の多賀正昭氏（8冬、12冬、21冬）を中心としてやはり古くから活動が続けられてきた。茨城支部の設立はそのような南極OBの多い職場を中心に設立の意思確認を行い、また、退職されているOBには可能な限り連絡を行い、多くの方の賛同によって設立の運びとなった。

写真 1　大洗水族館主催「南極展」の説明員ボランティア、左から多賀、松原、渡辺（源）

設立時の幹事は、つくばでは職場単位で選出し、また日立地区や鹿島地区からも幹事を決めた。その結果、活動の範囲が広がり、最初の茨城支部活動は 50 周年事業の一環として、2006年のゴールデンウィークに、大洗水族館開催の「南極展」の説明員ボランティア活動を行った（写真 1)。この活動には延べ24名が参加した。

茨城支部の南極50周年事業の最大イベントは、2006年10月7-8日に「つくばカピオ」で開催された、つくば市主催「つくば科学フェスティバル」で行った「南極教室-南極観測50年の今と昔-」である。1月から幹事会を重ね、それぞれのOBが自分の得意分野の作業を分担し、準備を行った。その内容は講演会、昭和基地とのテレビ会議、展示の3つの分野から構成された。講演会では特別講師として、元極地研究所長の渡辺興亜氏を始め、9 名のOB による講演を行った。展示では南極氷、隕石、ペンギンの剥製、解説パネルを前に、OBが解説を行った（写真2)。

写真２「南極教室」における展示風景

昭和基地とのテレビ会議では昭和基地からの生中継を行い、会場の子供たちからの質問に昭和基地の隊員が映像を交えて回答した。このイベントにはOB会から 44 名が参加し（写真3)、来場者数は3300名余りであった。

この活動は我々南極OBにとって非常に意義深いものであった。それまでオーロラ会などの壮行会では、どうしても同じ隊次の仲間が集まり、昔話に花を咲かせる同窓会的雰囲

気が中心であったが、「南極教室」という共同作業を通じて、隊次を越えたつながりができた。そのため、この年のオーロラ会では例年を遙かに上回る参加者が集まった。

写真 3　「南極教室」参加メンバーの集合写真

その後、「南極教室」によって茨城支部の存在も教育機関や公的機関の間で知られるようになり、つくば市の教育的な行事に講師を派遣して欲しいという要請やイベントへの協力依頼も来るようになった。その最も顕著なものが 2007 年 8 月 18 日-9 月 30 日の期間開催された、つくばエキスポセンター主催「南極展」への協力である。その主な内容は期間中会場に常設されたパネル、剥製、氷などの展示、8 月 25 日に昭和基地とテレビ会議システムを用いて実施された「南極中継」(写真 4)、9 月 2 日及び 30 日に実施された講演会である。茨城支部の協力は、4 月の企画立案段階から前年の 50 周年事業の経験をもとに各企画内容にアドバイスやアイデア提供する形で参加した。この段階ではパネル等展示物の選定・内容を監修した。「南極中継」では、昭和基地側、つくば側双方に OB 会員が出演し、また、テレビ会議システム機器の操作まで行った。講演会では高層気象台の松原廣司氏（21 冬，29 冬，46 夏（総隊長））を始め、4 名の OB による講演を行った。期間中の夏休みの週末には、茨城支部の会員から広く参加を募り、1 日平均 6 名程度の説明員ボランティアが、展示物や自らの経験を展示会場で説明した。

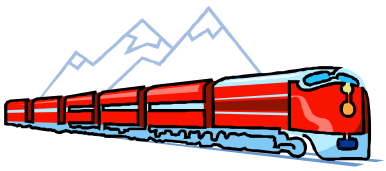
写真 4　つくばエキスポセンターでの「南極中継」の様子

このイベントには OB 会から 35 名が参加し、期間中のつくばエキスポセンターへの一般来場者数は約 3 万 2 千名、前年比約 6 千名増であった。このような大幅な来館者数の増加は、南極展の効果であったと分析される。また、南極展はマスコミでも大きく取り上げられ、朝日新聞や NHK 始め、多くの OB が新聞・テレビに登場した。

このように南極 OB 会茨城支部の活動は、隊次を越え、縦糸と横糸が結びついたつながりへと発展した。南極という地球規模での活動が、地域活動という身近なものとなって再構築されたことは、予想外の成果であった。また、各イベントを実施する際、南極 OB のプロフェッショナルな仕事っぷりと、腰の軽さ（よく働くという意味）も改めて確認できた次第である。

ここで紹介した各イベントの報告書は、茨城支部のホームページ（http://www.jare.org/ibaraki/ibaraki-ob_index.html）に掲載されているので参照頂きたい。

最後に、各イベントでお世話になった地域の各団体、国立極地研究所、OB 会本部、そして茨城支部の皆さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。　　（青木輝夫　記）



連載「観測最前線」①

2006／2007 夏季に行われた 日本－ドイツ共同航空機観測と国際空港

平沢尚彦

極地研究所／総合研究大学院大学　気水圏グループ／極域データセンター

ドイツとの共同航空機観測は第 47 次及び第 48 次の夏隊の計画で、1 年目に地球物理系の観測、2 年目に今回紹介する大気エアロゾル分布の観測（ANTSYO-II：Antarctic Flight Mission at Syowa Region II）が行われた。ドイツ側の代表機関は AWI（アルフレッド・ウェゲナー・極地海洋研究所）である。AWI と極地研究所は、北極圏のスバールバル諸島でノルウェーが展開する国際科学観測村ニーオルスンにそれぞれの観測施設を持ち、そこを拠点とした北極ヘイズに関する共同航空機観測などを行ってきている。そうした共同観測の延長上に南極での共同航空機観測が実現した。

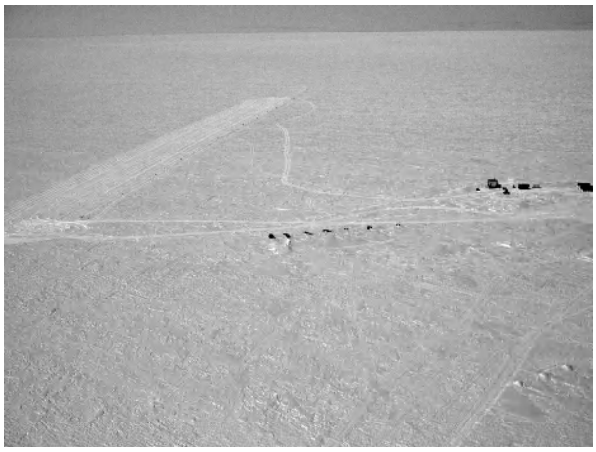


図 1　上空からの S17 航空拠点の様子。左上に滑走路、中央に燃料ドラム缶デポ地、左側に高床式建物とテント 3 張り（端）が見える。

“しらせ”のヘリからの写真（図 1）に見られる全長 1.2km の滑走路が S17 に作られた。写真には唯一の建築物である食堂棟・発電棟、３張りのテント、及び燃料デポ地も見えている。食堂棟・発電棟は前次隊により建設された高床式の建物であり、床を吊り下げる６本の支柱を継ぎ足すことで概念上半永久的に雪面上に維持しようというものである。同様の造りは、東南極最西端のドーム（氷床に形成される緩やかなピーク領域）に既に建設されているドイツのコーネン基地（図２）で運用されている。

この航空機観測のために S17 に滞在したメンバーは、日本人 4～5 名に対し外国人 8～11 名と、日本の観測拠点でありながら外国人の方が多くなった。この航空機観測に参加する隊員や物資の大部分の移動・輸送には、日本も参加している東南極域の国際的な航空網 DROMLAN（Dronning Maud Land Air Network）の利用が必須であった。これに参加する各国基地の分布を、DROMLAN 事務局が作成するホームページから抜粋し図 2 に示す。そこに、今シーズンの日本のいくつかのグループの飛行経路の概要を重ねた。南極大陸に渡る経路は 2 つある。一つは Ilusin（イリューシン）という大型機でケープタウンからロシアの Novolazarevskaya（ノボラザレフスカヤ）基地に向かうもので、ANTSYO-II 関係者やドームふじにおける氷床掘削のグループはこれを使った。もう一つはケープタウンからノルウェーの Troll（トロール）基地に

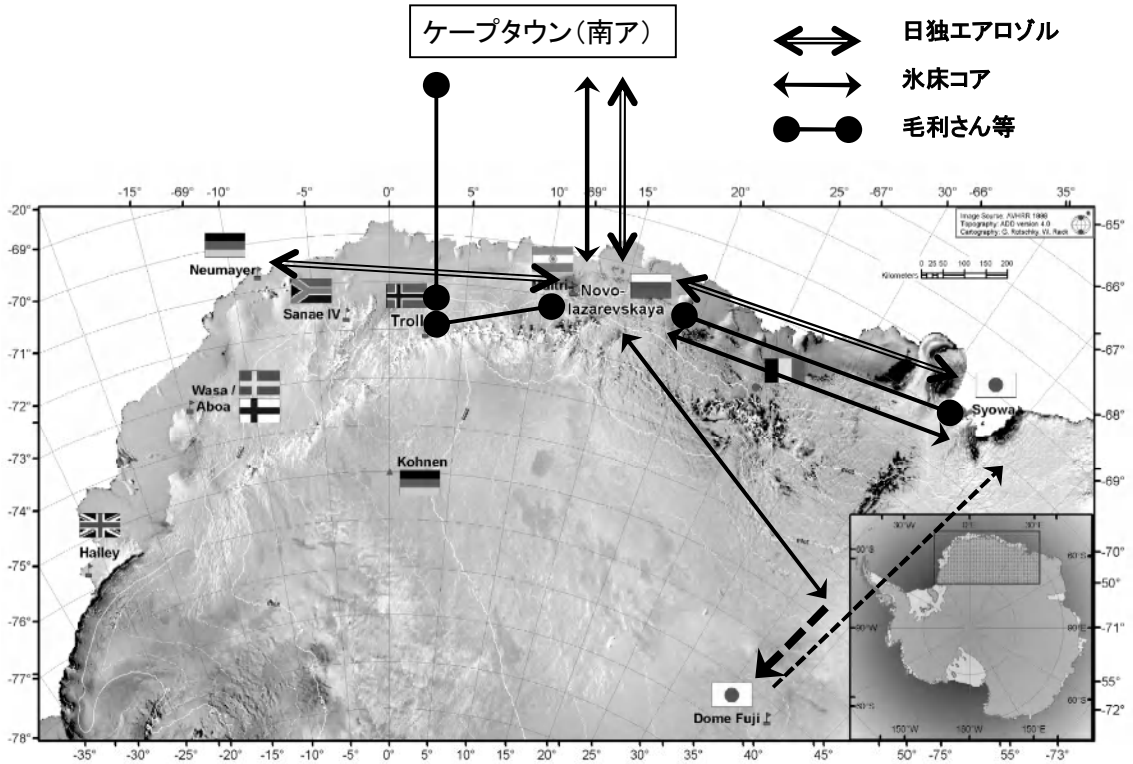


図 2　DROMLAN（Dronning Maud Land Air Network）に参加している各国の基地の分布と、2006/2007 シーズンの日本のいくつかのグループの飛行経路の概要。

向かう大型機 P3N-Orion で、南極観測 50 周年記念事業として行われた毛利衛氏、今井通子氏、立松和平氏の昭和基地訪問がこれを使った。南極大陸上では、カナダの会社が運行する Basler（バスラー）機（図 3）が各国の基地間を結ぶ。図 2 は、また、S17 が国際空港であることを意味し、昭和基地に新たな任務が加わろうとしている。昭和基地への行き来が“しらせ”のみによったこれまでとはまったく異なる状況が近づいている。

図 3　ドイツの観測用航空機 Dornier と DROMLAN 用航空機 Basler（S17 で）。

航空機観測は AWI が所有する Dornier（ドルニエ）機（図 3）により、2006 年 12 月に Neumayer（ノイマイヤー）基地（ドイツ）を拠点として飛行回数 15 回、総飛行時間約 40 時間、2007 年 1 月に S17 で同 15 回と約 42 時間を実施した。観測の目的は、エアロゾルという大気中に存在する微粒子の測定をすることである。エアロゾルは雲生成のもとになる物質であり、その状態は最終的に降水過程に影響を与えるとされ、また別に、エアロゾルや雲は太陽光などの光の伝達に影響を与える（光の遮蔽や吸収など）ことで気候変動にかかわるとされる。人の影響の少ない南極域で、エアロゾルの濃度や成分の特徴を知り、それを維持する自然のメカニズムを考察することが今回の目標である。現在の南極域のエアロゾルの量や成分の特徴を把握しておくことは、将来の変化を規定する上でも必要であろう。

直径が数 10ｎｍ（$1/10^6$m）から数μｍ（$1/10^3$m）のエアロゾルについて、大きさごとに数濃度を測定した。最も小さい粒子は気体から粒子化して間もなく、大きいものは雲粒として成長する直前の状態と考えられる。また、エアロゾルの化学成分分析のためのサ

ンプリングを行った。

図 4 に開水面まで飛行した 2007 年 1 月 11 日の結果の一部を示す。S17 を離陸した航空機は昭和基地の北方を抜け、定着氷域（Fast sea ice）、流氷域（Pack ice）、開水面（Open water）へと飛行した（図 4 上段）。図 4 下段には、エアロゾル粒子数濃度と航空機の高度を時系列で示す。S17 から開水面に向かう往路では、低層の大気境界層内（高度約 250m）を飛行したが、その際、定着氷域から流氷域に入るところで急激にエアロゾル数が増加しており、氷の隙間から大気へのエアロゾルや水蒸気の供給と関連していることが想像される。

我々観測グループはほとんどの隊員が“しらせ”のヘリで昭和基地に渡った 12 月 20 日に S17 に移動し、それから約 50 日間昭和基地外の野外活動を維持し、2 月 9 日に無事帰還することができた。S17 拠点立ち上げから撤収まで、そして我々の関われない観測期間前後の準備や整理を含め、“しらせ”乗組員、第 47 次及び第 48 次観測隊、国内・国外関係者他、多くの人々の支援を得た。それらの方々に深く感謝いたします。

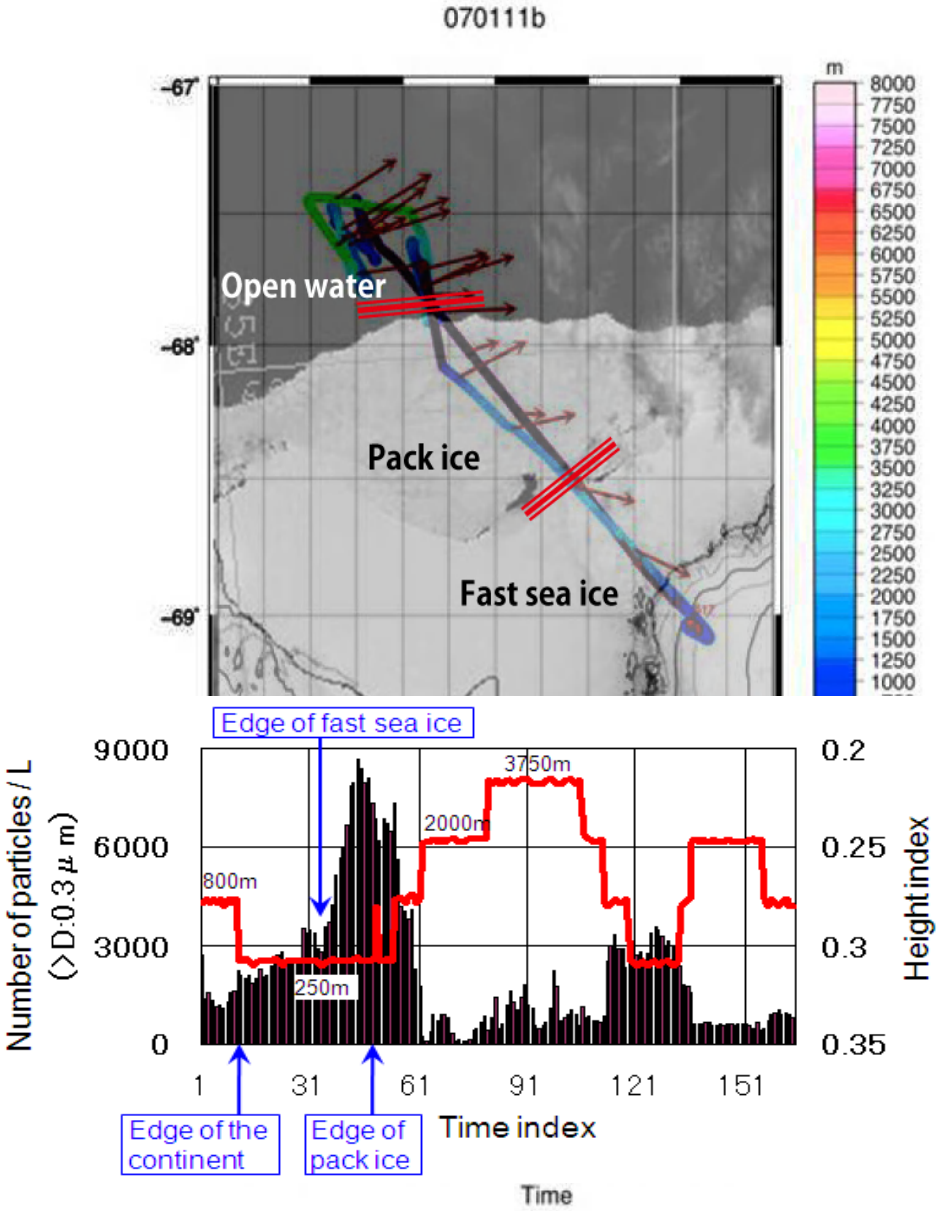


図 4　航空機観測結果の速報値。上段：NOAA 衛星可視画像による地表面状態の分布と飛行経路。矢印は飛行経路上の風向風速を示す。下段：直径 0.3μm 以上の粒子数濃度（棒グラフ）と航空機の高度の指標（厳密な値ではない）の時系列。大陸の末端（Edge of the continent）、定着氷と流氷域の境目（Edge of fast sea ice）、及び流氷域と開水面の境目（Edge of pack ice）を図中に表記。

広報委員会からのお知らせ

１、会報第２号の発行は来年２月頃を予定していましたが、その予定を繰り上げ、総会議事録特集として急遽発行することにしました。今総会で議決した改正ＯＢ会会則第１４条では「総会の議事は議事録を作成し、会員に通知する」となっています。会報のほかに議事録を作成するよりは、総会特集の会報にして、会報の議事録化を試みました。もう一つの理由は、ホームページに総会の内容を載せる必要がありますが、ホームページより会報の届く時期があまりに遅いのでは、情報伝達という面から見てあまりよいことではなさそうだ、ということです。

２、このような事情ですので、創刊号でスタートした連載の「時は巡り」と「氷海奮戦」は、休載します。たちまちお休みで、申し訳ございませんが、なにしろ手探り状態での作業ですので、お許しください。

３、新たに「支部便り」と「観測最前線」という２本の連載をスタートさせました。この２本とも次々にバトンタッチして行きますのでよろしくお願いいたします。分かりやすく、見やすくするために、写真や図をつけて投稿してください。

これで連載ものは１号に掲載した「時は巡り」と「氷海奮戦」と合わせて４本になります。原稿入手の都合などで、休憩することもあるかもしれませんが、お許しください。原稿や写真・図などはそのまま全量掲載というわけにはいかないことがあります。また、経費の都合で全部カラーにならないこともあります。あらかじめご了解ください。

４、総会では、会則が議決され、単年度の収支計画も承認されました。会員名簿の作成も進んでいます。支部との関係も密度を増してきました。南極ＯＢ会の基礎固めが着々と進んでいます。

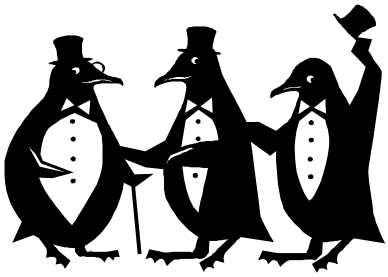
こうなってきますと、活動を支える資金計画、特に収入の道を安定させなくてはなりません。総会で決まった会則運用規程第４条には「通信費として年額３０００円を納める」と明記されました。今回も振替用紙が同封されます。まだ納入されていない方は、ぜひご協力をお願いします。

５、建造中の後継新船の名前が「しらせ」と決まりました。公募規程には現存する船の名前は駄目だとなっていたのですが、「しらせ」の名前は捨てがたく、南極ＯＢ会として引き続き「しらせ」にして欲しいと要望しておりました。今回の決定にほっとしています。

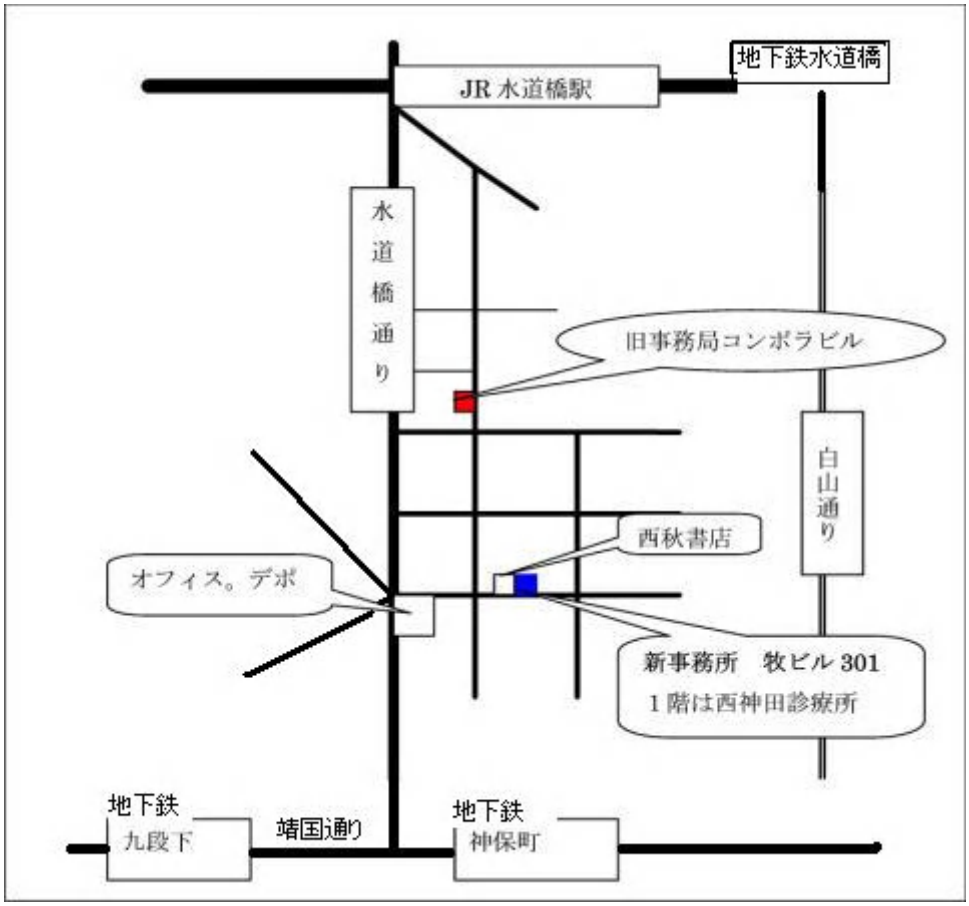
６、南極 OB 会の事務局は東京都千代田区西神田２丁目にあります。最寄り駅は JR「水道橋」駅、あるいは都営三田線の「水道橋」駅、南からですと都営三田線および都営新宿線あるいは半蔵門線の「神保町」駅からそれぞれ徒歩１０分くらいです。次ページに事務局までの略図をつけましたので参考にしてください。

７、OB 会事務局近辺の案内をします。事務局は西秋書店の東隣、牧ビルの３階です。１階が「西神田診療所」で、その右側の入り口から狭くて急な階段を登ってください。

８、事務局には、元極地研究所職員の長谷川慶子さんが、原則として水曜日と金曜日の午後に勤務しています。お立ち寄りいただく際は事前にご連絡ください。



事務局の案内図



ＪＲ「水道橋」駅西口より徒歩１０分

都営地下鉄「水道橋」駅、東京メトロ「九段下」駅、「神保町」駅より

徒歩１０分程度

****

南極 OB 会事務局
所在地　〒１０１－００６１
東京都千代田区西神田２－３－２　　牧ビル３０１
電話＆Fax　：　０３－５２１０－２２５２
E-Mail　Address　：　nankyoku-ob@mbp.nifty.com
南極 OB 会ホームページ　：　http://www.jare.org /

****